

# 2014 年度 センター試験 国語(現代文) 分析

## 全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	大問数：2 題	解答数：20 問	
難易度の変化（対昨年）	○ 難化 ○ やや難化	○ 変化なし ● やや易化	○ 易化
問題の分量（対昨年）	● 増加	○ 変化なし	○ 減少
出題分野の変化	○ あり	● なし	
出題形式の変化	○ あり	● なし	
新傾向の問題	○ あり	● なし	
<p><b>総評</b>                  評論は昨年の昭和 30 年代の小林秀雄の文章に比べると、文章構成が明確で論旨がとりやすい文章であった。ただ、漢文と武士との関係が主題となっているので、読み辛いと感じた受験生もいたのではないかと。小説は問題文の分量が増加したとはいえ、話の筋がとりやすく、昨年の「地球儀」と比べると非常に読みやすかった。評論、小説とも近年の設問には見かけない問われ方もあったが、設問のレベルは変わっておらず、その意味では文章そのものが取り組みやすい分だけ、昨年に比べてやや易しくなったと言える。</p>			

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	齋藤希史『漢文脈と近代日本』	50 点	近世の士族が漢文の読み書きによって特定の思考や感覚の型を身に着けていったことを、中国における書き言葉と士大夫の関係と結び付けて考察した文章。各段落に番号が付された点が特徴的である。設問のレベルは例年並みであるが、問 3 の傍線部に関する具体的な展開の説明問題や、問 4 の傍線部の結果ということが可能になったのかをたずねる問題は、近年の設問には見かけない問われ方であった。
第 2 問	岡本かの子『快走』	50 点	3 年連続で、短編小説の全文が出題された。一行空けによって 4 つのパートに分かれた小説だが、一昨年とは違い、一つの話の筋がはっきりしており、話の流れが追いやさしい。設問自体は例年通り、本文照合をしっかりとすれば解答できるものである。ただし、問 4 の「陸郎と道子とはお互いをどのように意識し合う関係として描かれているか」という問われ方や、問 5 の二つの傍線部の説明を求める問題は、近年の設問にはない形であったため、戸惑いを覚えた受験生もいたかもしれない。

# 2014 年度 センター試験 国語 (古典) (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 国語全体で 80 分

大問数・解答数	古文：6 題 (8 問)	漢文：7 題 (9 問)
難易度の変化 (対昨年)	古文：○ 難化 ○ やや難化 ● 変化なし ○ やや易化 ○ 易化	漢文：○ 難化 ● やや難化 ○ 変化なし ○ やや易化 ○ 易化
問題の分量 (対昨年)	古文：○ 増加 ● 変化なし ○ 減少	漢文：○ 増加 ○ 変化なし ● 減少
出題作品・ジャンルの変化	古文：○ あり ● なし /	漢文：● あり ○ なし
出題形式の変化	古文：● あり ○ なし /	漢文：● あり ○ なし
新傾向の問題	古文：○ あり ● なし /	漢文：● あり ○ なし
<p><b>総評</b>                      古文は、『源氏物語』からの出題であるが、『源氏物語』のあらすじを知らなくても十分解答できる。設問は、物語文が出題される場合の典型的なものである。読解対策をしていた受験生は問題なく解答できたと思われる。                      漢文は、例年は標準的な返り点・句形などの知識で解くことができた書き下し文を問う設問が、本年度は内容解釈・文章構造を踏まえた読解力が必要な設問に変わった。さらに、文章内容も『荘子』の思想を踏まえた著者の考えを述べており、丁寧に読み進めないと内容理解が難しい。全体として、受験生にとっては例年より解答時間がかかり、難しく感じられたと思われる。</p>		

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 3 問	古文『源氏物語』 ※平安・作り物語	50 点	本文の分量は昨年とほぼ同様である。本文は全 9 段落から成り、各段落ごとに会話文や心内文が用いられているという特徴があるが、解釈上難しい箇所には語句注があるので、読解自体にはさほどの困難を感じないはずである。 問 5 は、例年出題されていた和歌の解釈・修辞法を問う設問ではなく、会話文の話者と内容を問う設問に変わった。しかし、A・B・Cの「和歌」がA・B・Cの「会話文」に変わっただけであり、難易度自体は変わらない。 問 6 の文章内容合致問題は、各選択肢の吟味を慎重に行わなければ正解が出せないが、難易度は昨年度と変わっていない。
第 4 問	漢文・陸樹声『陸文定公集』 ※明代	50 点	昨年の 198 字から 184 字へと 14 字減少し、設問も 8 から 7 へと 1 問減少した。 昨年同様 1 段落構成の文章に見えるが、問 6 では論旨の展開に従って 3 段に分ける設問が出題されている。この設問形式は 1991 年度の本試以降出題されておらず、受験生はとまどい、解答時間もかかったと思われる。しかし形式が変わっただけであり、文章全体の論旨を問う設問は毎年出題されている。文章全体に目を向ける練習をしていれば正答を導くことも困難ではなかったはずである。 返り点・書き下し文に関する設問は、問 2・問 5 の 2 問が出題されている。問 2 は内容解釈に基づいた文構造が理解できないと正答できない。これが全体の難易度を高めていると思われる。